



菱の笑

佐賀大学理工学部同窓会会報創刊号

1999.10.1
創刊号

理工学部同窓会設立に当って

会長 秋 永 正 幸



理工学部同窓会会員の皆様におかれましてはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

本年は佐賀大学創立50周年の記念すべき年であり、又来年は理工学部第一期生が卒業して30年目を迎える、この節目の時期に理工学部同窓会が楠葉同窓会から独立し旗揚げ出来ましたことは同窓生の一員としまして大変喜ばしいことと思っております。

同窓会設立に至るまで、ご努力頂いた設立準備委員会の前山委員長初め各委員の皆様の熱意と情熱とご努力に対し敬意を表するものであります。

また、楠葉同窓会の一員として長年ご指導ご鞭撻を頂くと共に、今回の同窓会設立に当ってはご理解を示して頂いた楠葉同窓会の諸先輩に対し、深く感謝申し上げます。

さて、理工学部は昭和41年発足時、5学科(170名)でスタートし、その後11学科に増強され、現在では更にそれを7学科へと改組され、その充実ぶりは目を見張るものがあります。常に社会のニーズに合わせて学科の増強・改組がなされ、優秀な卒業生を送り出し、今では同窓生も9,000名を超え、全国各地で多種多様な分野でご活躍されています。

今、日本経済は未曾有の不況に喘いでいますが、今までの日本経済成長のつけと言われ、この不況から脱却するために官民を問わずリストラと意識改革が求められています。一方では地球環境問題が深刻化し、日本が世界に約束したCO₂削減、更に環境基準強化等の対応に日本全体が追われています。今程、

専門性をもち、多方面に幅広い知識をもち、技術の進歩に対応できる人材が求められている時期はありません。

改革の嵐は国立大学に迄及びその運営の有り方が変わろうとしていますし、これからは大学の存在価値が問われる社会になります。

以上の様なことを考慮しましても、理工学部のハードとソフトの両面を持ち合わせたユニークな存在は今の社会ニーズに合っていて、今まで以上に社会に貢献できるものと思います。この変革の厳しい時期に同窓会が設立されましたが、設立の基本方針である「理工学部の発展と共に佐賀大学の発展に寄与する」の精神を持って同窓会会員の皆様のご協力を得て、役員一同、心を一つにして会員の皆様のためになる運営を図りたいと思いますのでご協力をお願いいたします。同窓会は船出したばかりです、より良い同窓会にするには会員皆様のご意見が是非必要ですので総会等への多数の参加をお願い致します。

最後になりましたが、不肖私が会長の重責を引き受けましたのは第一期生の責任感からでして、他の役員のご協力を得て務めさせて頂きますが力不足はご容赦願います。

／プロフィール／

昭和40年佐賀県立小城高校卒業
昭和41年理工学部機械工学科入学
昭和45年同上卒業、佐賀板紙株式会社、
平成8年王子製紙部長

祝 辞

理工学部長 近藤 道男



佐賀大学は、1999年6月に創立50周年を迎えました。この記念すべき時に、佐賀大学同窓会の一翼を担う理工学部同窓会の誕生は、理工学部の歴史に大きな一頁を加えて頂いたこととなります。学部同窓会員となるべき皆様、同窓会創立は大変おめでとうございます。この創立までにこぎつけた関係者の皆様の大変なご苦労と多大な熱意に対して、学部教職員一同、深く感謝し、敬意を払うものです。

理工学部は、すでに30周年を経過し2000年には30期生の卒業生を送ることになります。大学院（修士・博士）の修了生を含めると今や10,000人の卒業生を擁する大世帯の理工学部同窓会となります。留学生の卒業生もまた年々増加しています。その卒業生（博士修了者）から優秀な人材が出て、外国人教師は現在9名となって、理工学部の教育研究に参加しています。

同窓生の1期生は50歳を過ぎて、それぞれの社会で重要なポジションにあると思います。理工学部は強力な身内の同志を得て、意を強くすると同時に、大学の外からの同志の厳しい評価を受けて、相互に涵養する関係を持続し、学部の発展を期したいと思います。

開かれた地方大学として、地域社会の要望に柔軟に対応しうる学部の構成は、次の若い世代に適応した教育・研究を展開するものでなければなりません。大学改革の一つは同窓生諸君とともに考える視点を、学部にも備える必要があります。

一方、個性を拓く理工学部は、理工融合を

さらに推し進めて基盤と学際のパランスの上で、専門教育システムの軸足を大学院教育に転換し整備拡充を図ります。学部教育には人間性豊かな人格を備えた理工系学生の養成に教養教育の再考が求められています。大学教育の使命が知的資産の構築と発展にあり、大学はそのことで社会に寄与するとすれば、教育改革の新たな試みとして、例えば専門教養教育の形での知的枠組みの創出が望まれます。理工教育の幅広い、そして責任ある教育体制づくりが急がれています。

最後に、新しい理工学部同窓会の組織は関係者に多くの努力を必要とするでしょう。楠葉同窓会の先輩のご指導とご理解を得て、佐賀大学同窓会のなかで理工学部同窓会が不断の活躍をされますよう。また、皆様には新しい同窓会が多様な情報交換の場として、さらにご自信の母校へのエール発信の拠点として機能することをお願いし、理工学部同窓会のみまますの発展を祈念して祝辞と致します。



みんなで育てよう 同窓会

はじめから、全てを完璧に実施することはできませんが、あせらず、理工学部同窓会を堅実な同窓会に、懐かしむだけでなく役立つ同窓会に育てましょう。同窓会の主役はあなたです。ご意見をふるってお寄せ下さい。

理工学部同窓会を、どのように育てるか、特に同窓生同士、あるいは同窓生と佐賀大学とのコミュニケーションをどのように図るかが問題です。

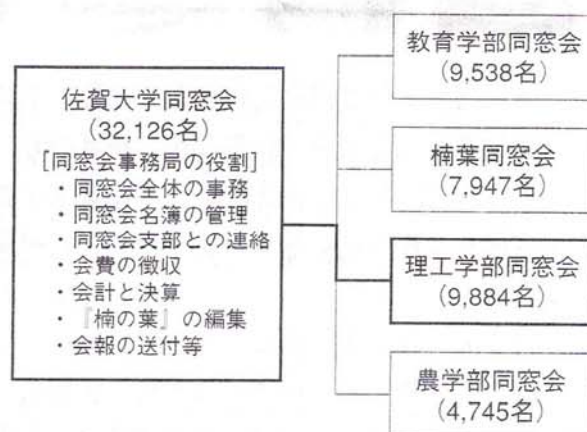
現在、会費納入者数は全体の半数近い状況ですが、今までに「楠葉同窓会」という言葉に馴染めなかった所以でしょうか、先陣を切って卒業された方々の会費納入率が非常に低いのが気になります。しかし、今からでも決して遅くありません。是非、積極的に参加して、利用できる同窓会に育てましょう。

〈平成11年度事業計画〉

1. 理工学部卒業生全員に、同窓会会報（佐賀大学同窓会会報『楠の葉』2回、理工学部同窓会会報『菱の実』1回）、『佐賀大学広報』3回を送付（佐賀大学理工学部広報『ScienTech』は平成12年度から送付予定）。
2. ホームページの開設（平成11年10月開設、本報8ページ参照）による情報の提供。是非、佐賀大学と同窓会を覗いて下さい。掲示板利用のご希望があれば、気軽に同窓会事務局まで。
3. 理工学部同窓会支部の開設（原則として、佐賀大学同窓会の下部組織に位置付けるが、理工学部同窓会が援助するもので、理工学部卒業生を主体とする支部活動が可能）。卒業生の皆さん！この制度を活用して、卒業生同士、また恩師との絆を

佐賀大学同窓会の役割と 4つ下部組織（同窓会）

（卒業生数は平成11年7月現在）



深めて下さい。

4. 各証明書の発行に関する代行と送付。
5. 在学生に対する就職懇談会の実施（アドバイザーは卒業生）。勤務先のアピールも兼ねて、後輩へよかアドバイスをお願いします。
6. 理工学部同窓会学生会の発足（各学年各学科毎に連絡委員約2名を選出。自治会とは明確に区別すること）。在学生に自主性を持たせましょう。
7. 新しく巣立つ卒業生への祝金。同窓会名簿の充実は自主的な卒業生の住所変更届出から。卒業式によろしく！

ご意見がありましたら、気軽に同窓会事務局までお知らせ下さい。理工学部同窓会事務局は佐賀大学同窓会事務局と共有です。

理工学部同窓会(菱実会)が一本立ちしました



役員紹介 こんなメンバーでやっていきます

第1回理工学部同窓会総会および理工学部同窓会創立記念式典・祝賀会が、残暑の厳しい去る8月28日(土)午後2時より、佐賀大学理工学部6号館(DC棟)で以下のように開催された。

14:00~15:00 総会

15:30~18:00 創立記念式典・祝賀会

総会では、理工学部設立準備委員会・前山道明会長より設立準備委員会解散宣言に引き続き、理工学部同窓会創立宣言が述べられた。準備委員会に対する労いと創立に対する歓喜の拍手の中で、待望の理工学部同窓会が発足した。さらに、理工学部同窓会会則(案)について議論され、その後、新役員が選出された。理工学部の第1回卒業生でもある秋永正幸新会長より、挨拶があった。また、今年度の事業計画(案)及び予算(案)が報告された。(活動方針については3頁参照)

創立記念式典と祝賀会では、秋永正幸新会長の挨拶に続き、近藤道男理工学部長、田中幸男佐賀大学同窓会会長、光岡正澄楠葉同窓会会長代理、佐古宣道学長からお祝いの挨拶があった。乾杯と歓談の後、各学科長と同窓生から祝辞をいただいた。また、作詞者である田中幸男先輩の先導のもと、新生同窓会役

員一同による佐賀大学学生歌「楠の葉の」の合唱が行われた。さらに、本学同窓会代表として大谷希幸先輩より、理工学部の生い立ちにまつわるお話の後、旧制佐高昭和7年度寮歌「南に遠く」と高田弘前学長の母校の五高寮歌「武夫原頭に」が披露された。祝いの門出にふさわしい盛大な祝賀会であった。

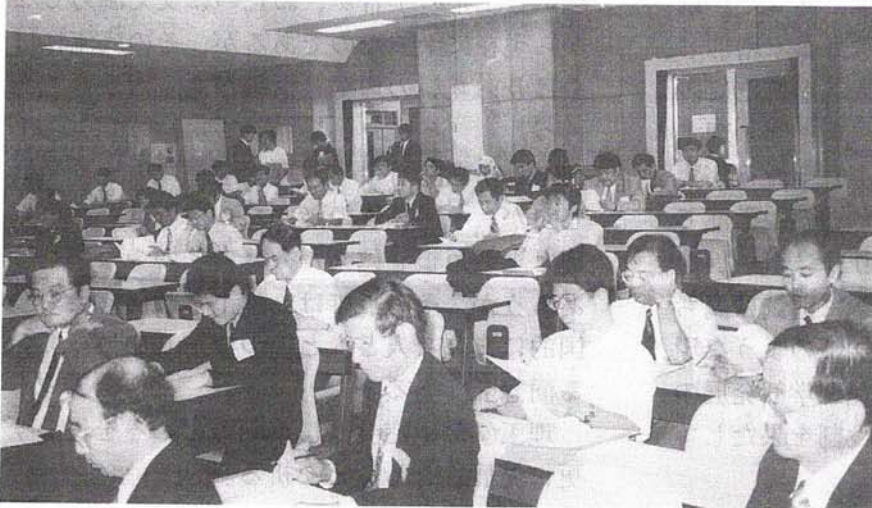
理工学部同窓会第1期役員紹介

(任期：平成11年9月～平成13年3月)

役職	氏名	卒業	佐賀大学同窓会
会長	秋永 正幸	S45・機	副会長
副会長	前山 道明	S46・機	副理事長
副会長	田中 正和	S48・化	—
庶務幹事	穂屋下 茂	S49・機	庶務
庶務	荒木 宏之	S51・土	—
庶務	深井 澄夫	S53・電子	—
組織	中島 道夫	S47・化	資料収集
組織	寺山 康教	H1・機	名簿
広報	椿 忠彦	S53・物	広報
広報	大渡 啓介	H2・工化	広報
広報	後藤隆太郎	H6・土	—
会計	太田 里美	S48・数	監事
会計	池上 康之	S61・生機	—
監事	古賀六七規	S49・土	—

第1回理工学部同窓会 総会 および 創立記念式典・祝賀会

報告



総会の様子
100余名の同窓生が集結



創立記念式典での1コマ
同窓生・来賓合わせて150余名



田中幸男先輩(中央)と
佐賀大学学生歌「楠の葉の」を熱唱

草創のころ

物理科学科 教授 村上 明



理工ブームの波に乗って設立された佐賀大学理工学部には、私が物理学科助手として着任したのは、創設2年目の1967年であった。以後、学科の数も年々増加し、多くの若手教官が新たに着任して来た。草創期の理工

学部では、理系、工系を問わず若手教官が集まって、学科間の垣根を越えて大学や学部でのさまざまな問題を議論したり、スポーツなどを楽しんだりしていた。まさに活気に満ち溢れていた良き時代であった。このような環境と精神的土壌は、その後の理工学部発展の原動力となり、非常に大きな役割を果たして来たと思う。

当時、全国でも稀な理工学部という旗印でそのユニークさを誇っていたが、理と工を分離しようという議論も1980年頃までは折りにふれ蒸し返されて出て来ていた。最終的には、理系と工系の学科が、お互いに支え協力しながら現在に至ったのであるが、その底流にはやはりお互いの理解と信頼があったからであろう。

あれから30有余年、理工学部は大きく発展したが、その発展の礎となったのは、やはり理と工の垣根を越えた人と人とのつながりであろうか。その点では、理工学部同窓会も全国的にまれな人と人とのつながりを持っている同窓会である。

理工学部同窓会が、草創のころを失わず更に発展されることを祈る。



昭和47年の佐賀大学概要表紙より：佐賀大学前四つ角の本館（下部）、右端の生協（木造）、現経済学部北の文理1番教室（現経済学部北側）、不知火寮、教育学部西の蓮根堀、理工学部はまだ本館（理工学部1号館）のみである。南部バイパスもない。

理工学部新設期の思い出

文化教育学部 教授 三原 信一

昭和42年3月、現在の体育館で催された卒業式に教育学部の学生として出席したとき、西側に建つはずの理工学部の予定地は田んぼのままでした。従って、4月に着任したときの研究室は、今の正門近くにあった旧図書館の2階にありました。文理学部の研究室に入られた方もおられたわけですが、旧図書館の2階には、学生部長の他、すでに他界された岩永、桑原両教授の研究室など、理工学部の教官の仮研究室があったわけです。

まもなく、学生運動が激しくなりましたが、この建物の周りを学生たちがデモするときには、震度2程度のゆれを感じたものです。しかし、この建物を始め多くの建物がこの時期に次々に壊されました。講堂が取り壊される

ときには、学生たちが建物の前に机を大量に積み上げ、中に籠城して抵抗しましたが、ついには説得に応じることができ、明け渡したのを思い出します。今、この時代を思い起こすとき、学生運動だけではなく、その後まもなく学生が自家用車に乗って通学し始めたり、電卓が普及し始めたり、理工学部の新設を促す時代背景があったのだと、あらためて実感させられます。あれから32年、理工学部は最も大きな学部になりました。今年のさらなる発展をお祈りしています。

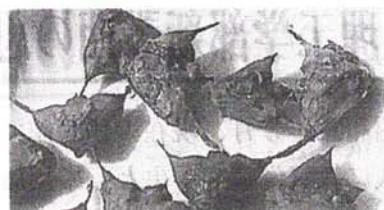


(佐賀大学教育学部 S42卒)



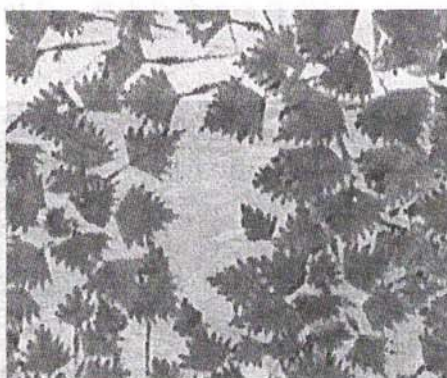
平成11年現在の佐賀大学：理工学部では、運動場跡に新大学院棟（6階）が建ち、隣接して理工学部8号館（サテライトベンチャービジネスラボラトリー：階）が建設中である。

りょうじつ かい
菱実会・会報名 「**菱の実**」



名称公募に応じて出されたものの中から実行委員で検討した結果上記のように決定されました。菱友会、菱の実会が次点候補であったが、糧友パンと同音であることや、のが入るとタイトルとして使う時に座りが安定しないことなどから却下しました。

佐賀大学の校章は菱の葉をデザインしたものであり、菱は佐賀平野のクリークに生育し菱形の葉に特徴がある。菱の実は9月半ばごろになると成熟し大きなたらい「はんぎー」に乗ったおばちゃんたちにより収穫され、塩茹でされたものが昔は子供のおやつになっていた。口に入れて強く舐めると白い果肉が外へ出てくる。両側に鋭い二本の刺があり、注意しないと口の中をさしてしまう恐れがある。



佐賀駅が北へ移動される以前は駅前の交差点の歩道でこの季節になると新聞紙に包んで売っていたが、最近は見かけない。

クリークの底に根を下ろしユニークな形の葉で太陽の光のエネルギーを集め独特の形の実を結ぶ。「大学がそのシンボルとして葉を取るなら我等工学部の卒業生はその実をシンボルとした。」といったところです。二本も刺を持っていると言うのもなかなか強気でいいんではないかと思えます。

中島道夫 (S47・化)

(写真は文化教育学部の宮脇先生にご提供いただきました。)

事 務 局 便 り

- ・会報「菱の実」のタイトル字を募集しています。ふるってご応募下さい。
- ・工学部同窓会ではホームページを開設いたしました。ご利用の際は、下のアドレスにアクセスして下さい。
- ・会報への原稿を募集しております。学生時代の思い出など何でも結構です。
- ・会報に対するご意見、ご要望などございましたら、お知らせ下さい。

発行 **佐賀大学工学部同窓会 菱実会**

佐賀市本庄町1 佐賀大学内

TEL0952-23-1253 FAX0952-25-5700

http://www.dousou.saga-u.ac.jp/ E-mail dosokai@ai.is.saga-u.ac.jp

発行者 秋永 正幸 (S45・機) 編集代表者 椿 忠彦 (S53・物)